青年海外協力隊を育てる会通信 No.31

参加と協力

30周年記念号

〒790-0011 愛媛県松山市千舟町５－７－２－２F
☎(089)947-6995

令和３年10月２日

会長就任ご挨拶

愛媛県青年海外協力隊を育てる会
会長　土 居　英 雄

コロナ禍も１年８カ月（原稿執筆時点）が経過しましたが、収まる気配はうかがえず、むしろ新型コロナウイルスの変異株による感染拡大に不安が募る日々が続いています。青年海外協力隊にとりましても、愛媛県青年海外協力隊を育てる会にとりましても本来の活動が困難な厳しい状況が続いています。昨年４月には県内からの派遣者すべてが帰国し、今年の２月から５月にかけて青年海外協力隊に派遣される予定の３名の特別派遣前訓練を宇和島市で実施しました。

こうした状況で育てる会の５代目会長を仰せつかりました。前会長の井上善一氏はご自身が青年海外協力隊の経験者という会長にふさわしい経歴の持ち主でありましたが、私は海外の長期滞在の経験もなく、また育てる会の末席に参加させていただいていたに過ぎません。歴代会長の実績を見ましてもその責任の重さを痛感しております。会員の皆さま方のご指導、ご協力をいただきながら、会長の務めを果たしてまいりたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

昨年は愛媛県青年海外協力隊を育てる会が誕生して30周年という節目の年でした。コロナ禍において皆さんが会の運営にご苦労されるなか、白潟八洲彦氏制作の砥部焼地球儀を県に寄贈でき、育てる会30年の歩みと国際協力・平和への理念を若い世代につなぐ象徴的なモニュメント（名称は「翔碧（とあ）の地球～愛・アイ・ワールド～」）となりました。

さて、育てる会30年の成果を、昨年の『参加と協力』に当時の井上会長がまとめて掲載しておられます。私自身の指標にもいたしたく、あらためて要点を抜粋紹介させていただきます。①毎月開催する運営委員会の役割の大きさ②県内高等学校で実施している「世界の料理教室」事業の意義③「視察の旅」が果たしてきた役割④歴史的評価のできる教育関係事業の実績――です。

私は①②③はこれまでの成果を踏まえて、充実・発展を図りたいと思います。加えて、今はコロナ禍にどう対処するのかということも必要です。「この感染状況でも立ち止まらずに今できること」と「コロナ以後を見すえてなすべきことは何か」を運営委員会の皆さまを中心に知恵を出し合っていきたいと考えております。そのことが④の実績に恥じない、育てる会の活動活性化に結びつくと確信いたしております。

一方、リモートによる取り組みが盛んになり、デジタル化やIoTの必要性、メリットが喧伝されています。時代の流れとして必然だと思いますが、50年以上の歴史を持つ青年海外協力隊と愛媛県青年海外協力隊を育てる会の活動の基本は「リアル」にあると思います。協力隊の主な目的は、①開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与②異文化社会における相互理解の深化と共生③ボランティア経験の社会還元と言われています。そして育てる会の目的は協力隊へのさまざまな応援です。これらの活動は、「リアル」な行動や展開によって目的が達成され、意義が生まれます。これを基本にIT活用も考慮しながら事業計画の実施に取り組んでまいります。皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

あれから30年…
持続する情熱を…

愛媛県青年海外協力隊を育てる会
前会長　**井 上　善 一**

平成２年11月全国18番目の組織として愛媛の育てる会が発足。あれから30周年の節目の年を迎えた。

当時の設立趣意書には、「協力隊に参加しやすい環境整備、派遣中の支援や情報提供、帰国後の再就職等の活動を、より広く広範な県民運動を展開しよう」と呼び掛けている。設立当時愛媛県からの隊員は約150名の派遣実績であったが、この30年間でその派遣実績は650名余りとなっており、育てる会の様々な活動もその一翼を担ってきたものと思うと同時に、歴代会長はじめ多くの関係者の皆様のご努力とご支援の賜物と感謝している。

この間、現職参加条例制定を県や各市町村に働きかけ、参加し易い条件整備にも取り組んで来た。特筆すべきは県の教員採用試験での加点制度の創設、途上国で経験した貴重な隊員体験を教育現場で生かして欲しいと、今は亡き先輩たちが一生懸命働きかけた成果であった。また隊員の派遣国での活動に必要な機材や道具など要請に応じて、カンボジア隊員には楽器を、スリランカ隊員には野球道具を送るなどの活動を支援してきた。これらの活動機材の提供は、「現地視察の旅」として現地での隊員活動現場を視察するという目的とともに持参した。また、資材調達は、幅広く県民からの善意の寄付であり、これらの活動をとおして、協力隊事業の理解と啓発に大きく貢献したものと感謝している。

30周年記念事業として最大の取り組みは、国境の無い砥部焼地球儀の制作であった。協力隊OBでもあり砥部町の白潟八洲彦氏（現代の名工）に依頼、名称も公募、新居浜市立北中学校の丸山愛菜さんの作品「**翔碧（とあ）の地球～愛・アイ・ワールド**」に決定した。この名称には、「私たちが住む美しい地球。青年海外協力隊が大きく羽ばたいて世界中の人たちが愛顔になれるように」と作品制作の意図を説明している。昨年７月愛媛県に寄贈、県庁第一別館ロビーに展示されている。

1965年発足した青年海外協力隊は、2015年50周年を迎え記念誌「持続する情熱」を発行した。そのタイトルの背景について「青年海外協力隊員及び元協力隊員に対して、活動中の情熱を忘れることなく、帰国後の活動と自身の生き方にも活かしてもらいたい、さらには次の世代にも伝えていただきたいとの願いがある」と記されている。願わくば、育てる会の活動も「持続する情熱」を持ち続けながら50周年へと更なる発展を願うものである。

『翔碧（とあ）の地球』制作者　白潟氏と共に

愛媛の育てる会
30年を振り返って

愛媛県青年海外協力隊を育てる会　副会長
愛媛県議会議員　**森 髙　康 行**

新型コロナ感染戦争下、スペイン風邪禍以来の100年ぶりの世界パンデミックの中、本県「育てる会」は、昨（2020）年、結成30年の節目を迎えました。

オリンピックすら１年延期した上で自粛開催を余儀なくされている情況で、政府や自治体が、集まるな、懇談するな、感染するなと呼び掛け、通常の活動が制限を受ける中での節目づくりは、大変な困難が伴われ実行されました。

私は、志を実現すべく、大学を卒業後の進路を、故末次一郎先生の書生としてスタートしました。先生は、幾多の戦後処理に取り組む中で、「（社）育てる会」の副会長として、国民運動として、青年海外協力隊の応援団を全国に拡大されていました。昭和61年に土居町議会議員として政治家生活に入った私に与えられたテーマは、愛媛県に組織を創ることでした。

幸運にも62年に県議会議員に当選させて頂いて以来の課題を、末次先生から有馬重喜先生を紹介され、梶浦先生方と共に、協力隊 OB との面談から、本県組織はスタートしました。愛媛方式と後に呼ばれた、月１回の運営委員会は、当初、隊員 OB・OG と、応援団の喧嘩の場でした。懐かしい限りです。

テレビ愛媛の今は亡き芝社長が結成呼びかけから結成式まで自ら友人スタッフに働きかけ、県内政財界に呼びかけて頂くと共に、初代事務局長に芝さんの盟友の愛媛新聞事業部長を経験された今は亡き武村剛吉氏が（後に進路相談カウンセラー）就任され、大変素晴らしい活動が展開されるようになりました。

二代目会長には、故一宮能和氏が就任され、当時の伊賀県知事も積極的に協力隊活動支援に取り組んで頂きました。派遣される隊員に親善大使委嘱する事や、表敬訪問の受け入れなどにも県幹部が当たるのが常態化したのもこの頃です。

旧軍人経験者の松廣武雄運営委員は教育の中での協力隊員の活用を称え、教員採用試験での加点制度の導入が、三代目の関会長の時実現し、全国に先駆けての取り組みは注目を集めました。

知事に、文部省 OB の故加戸守行氏が就任されると、協力隊への教員派遣の調整や、加点制度の充実も図られました。

草の根運動には、農業改良普及員 OG の高岡ミエコ先生が、地球の料理教室を県下、小中高の現場で、任国料理を隊員 OB・OG により、生徒たちと共に調理して食べる活動は好評で、愛媛の青少年に食を通じて世界とつながる国際理解教育として、隊員 OB・OG 教員と共に取り組まれました。隊員 OG の沖野光子さんと現在も引き継がれています。

また、帰国後の進路相談には、武村・滝口・本田と愛媛新聞 OB によって取り組まれ、現在は、南海放送パーソナリティーの宇都宮民さんへと、しっかりバトンが繋がっています。

さて、30年前の設立当初から忘れてはならないのが、事務局を引き受け続けて頂いた松岡功氏の存在です。塾の経営や世界地図普及活動に取り組まれながら、本会運営にも並々ならぬご支援ご協力を頂いております。

今後は、隊員 OB・OG が中核を担いつつも、県内政財界の応援団の力を更にお借りし、愛媛県に無くてはならない存在としての『育てる会』として、永遠の発展を目指して参りましょう。

世界と日本、そしてふるさと愛媛の為に。

「人づくり、国づくり」から「国境なき世界」へ

独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
事務局長　小 林　広 幸

愛媛県青年海外協力隊を育てる会設立30周年、誠におめでとうございます。この場をお借りし、井上善一会長をはじめとした貴会の長年に亘る協力隊に対する力強く、温かなご支援に、JICA を代表してこころからお礼を申し上げます。隊員一人一人に向き合う心の籠ったご支援に加え、教員の現職参加条例や教員採用試験における加点制度等にかかる皆様の取組みは、この事業の価値を一層高めつつ、新しい可能性を切り開いていただきました。

私が JICA 四国に勤務しておりました頃、愛媛県への出張はいつも心躍るものでした。歴史と今が自然と繋がる街並みはいろいろと語り掛けてくるようで、いつも東京第一ホテルに行く前には、城山公園に立ち寄り、雄大な景色を眺めました。そして、愛媛県は、青年海外協力隊の歴史が今に繋がる場所でした。30年に亘りこの事業を育てていただいた人々の思い、スリランカの子供達に手渡された野球道具に込められた思いは、「人づくり、社会づくり、国づくり」そのものです。

新型コロナウィルスの感染拡大は本事業にも大きな影響を及ぼし、昨年度はこの事業で初めての全世界からの一斉一時帰国が実施されました。隊員達は身の回りの物も十分に持てずに急遽帰国し、帰国後も約２週間の健康観察に努めました。私が一時帰国した隊員が健康観察を行っていた愛知県の JICA 施設で説明会を行った際、一人の隊員が駆け寄って来てくれました。出発前の松山で、コロンビアで得意の卓球を指導したいと目を輝かしていた隊員でした。急な帰国と健康観察で苦しい時にも関わらず私に見せてくれたその笑顔に救われました。待機期間中も遠隔指導を通してコスタリカに野球の楽しさを伝え続けた隊員、地球の料理教室での高校生達の笑顔、この間、明日に繋がる希望や勇気はいつも隊員と皆様から届けていただきました。

まだ限られた数の国ではありますが、徐々に隊員の再派遣が始まりました。再び多くの隊員達が世界に翔び発ち、各地で信頼を築き、２年間の活動を経て更に国内外で多文化共生社会に貢献することで、「翔碧の地球～愛・アイ・ワールド～」に描かれた国境のない世界実現に向け挑戦できるよう、我々も最善を尽くして参ります。引き続き、皆様のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

貴会の益々の発展と皆様のご健勝を心よりお祈りいたします。

現地隊員活動報告

私たちはふるさとに帰り、愛媛を元気にします！

『コロナ禍とベトナム』

大　森　美　和（松山市出身）
（2018年４次隊・ベトナム・看護師）

2019年４月、私はベトナムに看護師として赴任しました。配属先のロンアン省総合病院は、診療科が19科、約1,000名の患者が入院している大規模な病院です。私は「看護部」に所属し、看護管理に関する活動を行いました。「各診療科の看護監査を行い、医療安全に関する問題点を改善してほしい」、これが私に期待されている活動内容でした。実際に各診療科に行くと驚きの連続で、そのひとつは、看護師が医師の指示よりかなり速いスピードで点滴薬を患者に投与していたことです。看護師の不足により一人当たりの仕事量や責任が多く、また病院の看護手順書（マニュアル）はあるが十分に周知されていないなど、その背景には様々な理由がありました。最初は、医療安全面の問題を指摘しても、「ベトナムのやり方がある」「忙しいからできない」など、受け入れてもらえませんでした。

そこで、まずは人間関係を築くことが大切だと考え、各診療科の看護師長と積極的に交流しました。またベトナム人は自尊心が高いため、監査時には褒めてから助言を行うようにしました。すると「あなたが言うなら分かった。直します」と、次第に協力が得られる様になりました。しかし、活動がようやく軌道に乗った所で、新型コロナウイルス感染症流行によりJICAから日本への一時帰国の指示が出されたのです。活動を開始してから、１年が経とうとしていたころでした。

帰国後は先が見えず不安でしたが、日本国内でできる活動にチャレンジし、自己研鑽にも努めました。そして2020年11月下旬、ベトナムはコロナの感染状況が落ち着いていたため、再派遣が決定しました。首都ハノイにあるノイバイ空港に再び降り立ち、ベトナムJICA事務所職員が、「おかえり」という紙を持って出迎えて下さっていたのにはとても感動しました。

再派遣時、空港まで出迎えてくれたJICAスタッフ

それと同時に、コロナ禍で任国に戻る目途が立たない協力隊の仲間の姿が脳裏に浮かびました。私は「渡航再開第１号の私達が安全に任期を終えることで、他国の渡航再開に繋ぎたい！」と強く心に誓い、自分の活動の再出発にも気合いを入れました。

隔離生活を終えた後、任地ロンアン省に戻りました。ベトナムでは、コロナ感染が再発したため病院は厳戒態勢でした。病院の入り口は全て封鎖されており、職員は検温、マスク装着により病院内に入ることができました。そして病院内の至る所に、感染予防啓発ポスターや手指消毒液が設置されていました。マスク消毒と手指衛生など感染予防の徹底により、私の活動は以前と同様に行うことができ、コロナ禍でも有効性のある５Ｓ活動(注)に特に力を入れました。職場環境を整頓し清潔に保つことは、細菌の増殖を防ぐことができ感染予防に繋がるからです。もともと５Ｓはベトナム保健省の病院評価の指標であり評価対象となっていますが、まだ十分に浸透していない状況でした。カウンターパートに５Ｓが感染予防に効果があることを伝えると、強い関心を示してくれました。そして勉強会の開催、配属先と連携して作成した５Ｓ

５Ｓ日系人強制収容所についての勉強会

配属先　最終活動報告会

ポスターなどの啓発により、少しずつ定着していきました。再派遣中は、コロナ禍での活動となり緊張の連続でしたが、計画していた活動は実施することができました。最終日には「病院の改善のために、頑張ってくれてありがとう」と、感謝状とお礼の言葉を頂きました。

「いつかきっと世界を変える力になる」そうなりたいと、協力隊として活動に取り組んできましたが、気が付けばベトナム、そしてベトナム人が私を変えてくれたように思います。明るくて優しくて生命力に溢れているベトナム人と出逢い、たくさんパワーをもらいました。現在、四国にもたくさんのベトナム人が住んでいますが、彼らのような在住外国人が住みやすい街づくりに私も関わっていきたいと考えています。ベトナムで受けた恩のお返しを身近なところでできればと願っています。

私のボランティア活動をご支援して下さった皆様、誠にありがとうございました。

（注）　５Ｓ活動とは職場環境の改善に用いられるスローガンで、整理、整頓、清掃、清潔、しつけの五つのＳをそう呼ぶ。

軌跡をたどる Part I

故 加戸愛媛県知事の激励

砥部焼『翔碧の地球』制作
30周年記念事業

帰国隊員と共に　2013年

『ルワンダからの便り』

清　水　亮　佑（松山市出身）
（2019年・２次隊・ルワンダ・バスケットボール）

こんにちは。

私は2019年度２次隊でアフリカのルワンダという国に、バスケットボールの職種で派遣されています清水亮佑です。

2020年の３月から新型コロナウィルス感染拡大の影響で日本に一時帰国していましたが、2021年の４月にルワンダに再赴任することができました。

ルワンダは東アフリカに位置する国で、「千の丘の国」と呼ばれるほど丘があり、とてもきれいな街並みが広がっています。季節は乾季雨季があり気温は15℃から28℃程度でとても過ごしやすい国です。

現在首都キガリでのブリーフィング等を終え、私の任地である東部県ンゴマ郡へ戻り、３ヶ月が経とうとしています。

私は、IPRC Ngoma（Integrated Polytechnic Regional College）という職業訓練校にバスケットボールのコーチとして派遣されています。生徒たちは、建築や接客、コンピューターなど様々な分野を学んでおり、年齢は15歳から25歳くらいまでの生徒が多い印象です。バスケットボールクラブはセカンダリー（高校生の年代）のチーム男女、アドバンスデポロマ（大学生の年代）のチームがあります。

私は基本的に月曜日から土曜日まで学校で活動しています。平日の午前中は話し合いやデスクワーク等を行い、夕方からクラブ活動の時間になるのでバスケットボールクラブの指導をしています。この指導がメインの活動です。土曜日はGAMEDAYとしています。

ルワンダ人は「勝負」へのこだわりが強く、勝負に勝つためにいつも全力でプレイしています。勝負にこだわり、いつも真剣で全力なルワンダ人のバスケットボールから多くの事を学んでいます。

これまではバスケットボールの指導者が在籍しておらず、生徒たちはあまり練習することができていませんでしたが、私が今までバスケットボールを通して学んできたことを生徒たちに伝えていきたいと思います。同時に、私が帰国した後に継続して指導することのできる指導者を見つけていかなければいけません。日曜日はバスケットボールの普及活動として個人的にではありますが、地元のバスケットボールプレイグラウンドをめぐり、地元の子供たちとバスケットボールをプレイしたり、教えたりしています。少しでも多くの子供たちがバスケットボールに関わる機会を増やしていきたいです。現在新たな活動として、地域の子供達を集めて、私の学校でバスケットボールスクールを開く計画を立てています。

コロナ禍ということで、学校では様々な対策がされています（学校入り口での手洗いの徹底、検温、ソーシャルディスタンス等）。町の人々たちはマスクをつけ生活をしていますが、スポーツの際は基本的にマスクを外しています。最近では感染者数が増加傾向にあり、政府からの通達で新たな決まりが出始めています。このような時でも私にできることを見付け、活動していきます。

以上が私の現在の主な活動です。任期はあまり多くは残っていませんが、これからもルワンダの子供たちやバスケットボールのために活動をしていきます。

ありがとうございました。

自宅付近の様子

トレーニング中

生徒と一緒にドリブル練習

『止めることのできない国際協力と私の気持ち』

越　智　陽　水（松山市出身）
（2019年度２次隊・コスタリカ共和国・野球）

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行に伴い、緊急帰国となってから１年以上が経ちました。2021年３月末を以て契約解除となり、青年海外協力隊員としての任期を一度終えることとなりました。現在は、長野県にあるJICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所で４月から国内協力員として働きながら、特別登録制度(注) を活用してのコスタリカへ再派遣になる日を待っています。

まず、私が青年海外協力隊を目指したきっかけを紹介させてください。大学卒業後すぐに、母校である愛媛県立松山商業高校で保健体育講師として働き始めました。ある体育の授業中、ある生徒に「そんな態度じゃ、社会で通用しないぞ」と指導する場面がありました。その生徒は、私に「（先生）社会出たことないじゃん」と一言。正直イラッとしましたがそういった見方もあるのかと、私はハッとしました。私が指導しても一般的なことを言っているだけで生徒の心に響かせることができていないと思いました。そこで私自身に必要なのは人間的魅力、特別な経験だと考え、私の目に止まったのが青年海外協力隊でした。

駒ヶ根訓練所での70日間は、衝撃の連続でした。同じ日本人なのにも関わらず、様々な背景を持った個性的な人たちが集まり生活をする。「ここは、ほんとに日本か？」と思いました。今まで、どんな時でも相手の立場に立って考えているつもりでしたが、自分の意見を押し付けていただけだと気づくことができました。

そうして、2019年12月、コスタリカ共和国へ向け日本を飛び立ちました。それまで、野球しかやってこなかった私は、初めて日本以外の土地に降り立ち、全てが新鮮でした。多くの自然に囲まれた土地で、心豊かな人たちに触れ、私は活動への希望が湧いていました。しかし、着任した私を待ち受けていたのは、文化という大きな壁でした。日本では、部活動及びスポーツが教育の手段として活用されており、思いやりの心や自主性、社会性を育成し、豊かな人間関係の構築を目的に実施されています。ですが任地では、スポーツは楽しむべきであり、教育的な意義はあまりなかったように思います。そういうことからかミスをすれば自分の怒りのままに物を投げたり、グラウンド整備をしなかったりする選手、ゴミをポイ捨てする観客達。日本で求められる『野球・スポーツを通じて何を伝えればいいのか』と悩みました。それまでの私なら、スポーツをやるのであれば礼儀や規律を守るべきであると考え、グラウンド整備、道具の手入れ、ゴミ拾いなどを徹底してやらせたと思います。しかし私は、日本との文化・宗教的背景の違いを理解し、それらのことを強要せず、まず一人で始めました（写真１）。

写真１　みんな集まれ

そうすると、１日１日経つごとに私の考えを理解し、協力してくれている人が出てきました。どこの国に行っても、理念を持って活動してくれれば、興味を持ってくれる人がいることに気付くことができました。また、よく日本では日頃の生活態度がプレーに出ると言いますが、逆を言えば、プレーの中で相手を思いやる気持ちや社会性等の重要性に気付くことができると思い、野球のバックアッププレーを中心に教えることにしました。ですが、また新たな壁にぶつかります。バックアッププレーについて教えたくとも教えられない。それは、一人で実際に動いて見せることができず、コスタリカの人に、実際のイメージを湧かせてもらうことができないという点でした。

そんな矢先に、日本への緊急帰国が決定し、それから帰国まで１週間にも満たない時間でした。その頃の私は、３ヶ月もすれば再赴任でき

るだろうと安易な考え方でした。しかし、そう簡単に物事は進みませんでした。見通しの立たない中、青年海外協力隊員として活動を日本国内でし続けることで日本国内の人に国際協力に興味を持ってもらうことができ、私の課題であったチームプレーをコスタリカに伝えるチャンスだと考えました。そこで、高校の野球部監督である現・今治北高校野球部 重澤監督に相談をし、野球のフォーメーション動画の作成を今治北高校の野球部員とともに坊っちゃんスタジアムを借りて実施しました（写真２）。

その資料は、現在スペイン語訳を付けてコスタリカの野球レベルアップのために活用する予定です。そのため Zoom を利用して現地のカウンターパートやコスタリカ代表監督と連絡を取り、ミーティングを重ねながら完成を目指しています。その他にも、使わなくなった野球用品「世界の笑顔のためにプロジェクト」を活用し任地に送るために集めました。多くの協力者に恵まれて、コスタリカだけではなく、ジンバブエ、ブータンなど多くの国に支援をすることができました。

写真２　野球部員と共に教材作成

コロナ禍で、一度止まってしまった私の国際協力ですが、時計の針を止めることなく私にできることを改めて考えて実践していきたいと思います。

（注）　2020年７月末で一旦、JICA との派遣合意書は契約解除となるが、コロナウイルスの蔓延状況などを鑑みて青年海外協力隊の派遣が可能と判断されれば再派遣となるように登録する制度。

軌跡をたどる PartⅡ

2013年総会

協力隊50周年記念　2015年

2016年総会

帰国報告会　2018年

帰国隊員の活動紹介

がんばってます

『挨拶から、国際交流をすすめる会へ』

近　藤　民　好（西条市出身）
（平成19年度１次隊・エクアドル・小学校教諭）

「オラ　コモエスタ！」みなさん、お元気ですか。世界中で猛威を振るっているコロナウイルス感染症の影響は、南米エクアドルでも甚大な被害になっていることを聞き、大変心配しております。早く終息することを祈るばかりです。

私は、パスタサ県の教育事務所の要請でプーヨ市に派遣されました。エクアドルの大好きなことの一つに挨拶があります。挨拶は、一人一人と時間をかけ、日々の生活について話します。午前中の仕事の時間の多くが挨拶で過ぎてしまうこともあります。私の言葉の力が未熟だったため、この長々とした挨拶は赴任当初とても戸惑うことが多かったのですが、この挨拶のおかげで特に心細かった前半は救われました。赴任当初は、職場が夏季休業中で事務所に誰もおらず、市役所の一室で誰か来るのを待つのが仕事のようなものでした。市の職員との、毎日朝と帰りの長い挨拶がエクアドルと私をつないでくれていたからです。その後、９月になり、担当の人が来たのですが、私が派遣されたことを知らない、ということからの始まりでした。しかし、いろいろな学校や地域を案内してもらい、話をする中で私の仕事は「学校へ行って子ども達に算数を教えること、学校で先生たちに教え方を伝えること。研究会で先生たちに講演をすること。」となりました。それからも順調ではなかったものの、日々の挨拶を中心にエクアドルの教師と子供たちと一緒に仕事をすることができ、無事活動ができたと思っています。私が帰国した後、その職場には隊員が続けて要請され、活動が継続されていたので、少しは役に立ったのだと安堵しています。

さて、私は、現職派遣での参加だったため、日本に帰国後すぐ小学校の担任として働きました。学校の集会や学級でのいろいろな授業の中に、エクアドルの挨拶や生活、文化、自然について伝えました。特に、子ども達が海外に行った時に、挨拶が大事だということや自分の国の日本のことを話せることが大事なことを伝えました。そして今は、学校でSDGsを始め、国際理解や環境保全のことを伝えています。

帰国の時から、私は、お世話になった日本に何か恩返しをしたい、しなければならないという思いと、素晴らしかったエクアドルのことを伝えたい、JICA協力隊員のみんなを応援したいという思いがありました。その頃、同じ思いを持った元シニアボランティア（シリアOBタイOB）の岡崎正樹さんと出会いました。「西条市にも技能実習生のほかたくさんの人が来ている。しかし、外国から来ている人と接する機会が少ない。それではいけない。西条市にもっと国際交流を広めていかないといけない。」という思いが重なりました。そして、その思いが元隊員にも広がり、「国際交流をすすめる会」を一緒に立ち上げました。活動では、市内で帰国隊員報告会や映画会、パネル展示（図書館や銀行など）、各国の料理教室（アフリカ、南米、アジアなど）、体験教室など幅広く自分たちが体験し、学んできたことを多くの人に伝えています。毎年イベントや展示を楽しみに来てくれる人も増えてきました。発起人の岡崎正樹さんは残念ながら、昨年他界しましたが、この国際交流をすすめる会の活動を、今後も追悼の気持ちも込め、みんなで続けていこうと思っています。

エクアドルの５年生

国際交流をすすめる会

設立30周年記念特集

運営委員からのメッセージ

青年海外協力隊はコミュニケーション力豊かな“草の根の外交官”

JICA 四国 青年海外協力隊相談役
育てる会運営委員（フリーアナウンサー）
宇都宮　　民

青年海外協力隊との出会いから20年以上になります。2000年７月、愛媛県青年海外協力隊を育てる会が初めて企画･開催した出発隊員のトークショーで司会を務めさせていただきました。

「瞳をキラキラと輝かせて」とよく言われますが、トークショーの壇上で隊員の話を聞きながら、「キラキラした瞳」とはこれだ、と感激したことを覚えています。青年海外協力隊を志望した動機や派遣国の状況、求められている支援など、国際貢献への想いを、ステージで生き生きと語る彼らのコミュニケーション力の高さに驚かされました。

このトークショーは15年以上続き、育てる会や隊員 OB･OG の方々が楽しみにしてくださっていました。中でも前愛媛県知事の加戸守行さんは、現職知事時代から道子夫人とともに毎回のようにご出席くださり、出発隊員に対し「心の財布をいっぱいにして帰ってきてください」と素敵なメッセージを送ってくださいました。

青年海外協力隊は、派遣国の文化の中で共に暮らしながら、人としての交流を深めて支援活動を行っていきます。“草の根の外交官”と呼ばれる彼らの体験談や純粋な想いに触れることは、日本にいる私たちに、広い視野と気づきを与えてくれ、心が洗われるような時間でもあります。

ラジオ番組『世界の中心で愛を伝える！青年海外協力隊』（南海放送ラジオ、毎月第１・３日曜、17：30～）は、ラジオを通じて彼らの声を広く届けるために企画・制作したものです。2004年の番組スタート以来、愛媛県出身隊員のほとんどが出演してくれています。

協力隊活動で得たものを尋ねると、「途上国のために力になりたくて行ったのに、逆に現地の人に支えられて、与えたものより自分が得たものの方が大きかった」といった感謝の言葉が返ってきます。また、「『世界も自分も変える仕事』というキャッチフレーズがあるが、変わったというより一層自分らしくなった」と答えた隊員もいました。ラジオ番組やトークショーのインタビューを通じて、こちらが気づかされたり教えられたりすることばかりなのに、2013年JICA国際協力感謝賞を受賞し感謝しております。

こうした協力隊とのご縁から、現在、JICA四国青年海外協力隊相談役として、隊員の帰国後の進路支援を担当しています。近年、平和で豊かな日本の若者に対し、内向き志向やコミュニケーション力の低下、指示待ち、柔軟性に欠ける等々、懸念する声が多く聞かれますが、青年海外協力隊経験者は全く違います。途上国で自身がマイノリティとして困難な環境を乗り越えた経験から、「なんとかなる」「なんとかする」精神と行動力、グローバルな視点、多様性を認め合える傾聴力、そして、自ら発信し他者とつながるコミュニケーション力をもっています。必ずや故郷の、愛媛の、日本の力になれる存在だと感じています。

最後に、コロナ禍のため志半ばで帰国したり派遣が見送りになったりした隊員がいます。また、帰国報告のインタビューをしたものの、その後、派遣国にテロやクーデターが起こりインタビューした内容に対して派遣国の現状が大きく異なってしまったため、やむを得ず放送をあきらめたこともあります。私にとって、世界平和や安心安全は当たり前ではないことを教えられた20年でもありました。隊員たちが“草の根の外交官”として本来の活動ができる安全で平和な世界になることを、そして帰国後のさらなる活躍を願っています。

帰国隊員とトークショー

青年海外協力隊に憧れて

愛媛県青年海外協力隊を育てる会運営委員
三　村　冨士夫

昭和48年当時、東京で学生生活を送っていた私にある先輩から声がかかった。

“青年海外協力隊研究会”を立ち上げる、メンバーがいないから名前だけでも貸してくれ！

当時サッカーとアルバイトに明け暮れる私を知っての誘いであった。48年当時今と違い簡単に海外に行ける時代ではなかったように思う。青年……海外……協力隊……？

何これ？海外へ行けるの？単純な感想である。少し興味があり協力隊本部へ（当時広尾にあったと思う）一緒に行くことにした。

本部の担当者から青年海外協力隊の基本的な事を教わり、その後カンボジア王国の現状についての説明があった。この地球上には生きるために必死になっている人たちが沢山いる。自分は今何をしているのだろう？何をしたらいいのだろう？そして何ができるのだろう？

頭の片隅から離れなかった。

専攻は電子工学（マイクロ波無線工学）。この分野で何かできないだろうか？

時は過ぎ運よく無線関係の会社に就職、職場もマイクロ波衛星通信事業部へ配属となった。数年過ぎれば協力隊へ参加出来ると思っていた頃でもあったが、現実は甘くなかった。

この分野での技術革新はすさまじく当時は必死に仕事に明け暮れていた。協力隊で２年間職場から離れれば全くついてはいけなくなる。いつしか“青年海外協力隊”の文字が脳裏から消えて行ってしまった。

時は過ぎ平成12年春愛媛新聞の記事に目が釘付けになった。

“平成12年度あなたの目で見る国造りの現場 ODA 民間モニター大募集　今年度　JICA 四国支部の派遣国はモンゴル”。私にとってモンゴル＝司馬遼太郎（大阪外国語大学モンゴル語学科卒）。司馬さんの愛したモンゴルへ行きたい。その思いと ODA の現場を見てみたい、すでに忘れていた“青年海外協力隊”の文字がふつふつと湧きあがるのを覚えている。

是非に行きたいと思い応募した。質問形式のクイズとレポート。レポートには青年海外協力隊への思いと司馬遼太郎先生への思いを綴った。幸いにも合格し数回の研修の後、10月に派遣された。またも一旦途切れたかに思えた青年海外協力隊との繋がりが2011年秋に始まった。

経営者の勉強会で“愛媛県青年海外協力隊を育てる会”の事務局をされている世界地図の松岡代表との出会いである。色々と話をしていて意気投合し育てる会の運営委員をさせていただくこととなった。OB でもない私を温かく受け入れてくださった育てる会の皆様へは、感謝の一言である。

2016年カンボジアへ派遣されていた隊員から金管楽器を送ってほしい旨、育てる会へ連絡が入った。育てる会井上会長から現地視察を兼ねて持っていくのはどうであろうかと提案、約半世紀前に青年海外協力隊を知りその国がカンボジア王国、何か運命的なものさえ感じる。即参加を決めた。

2017年１月16日上海経由でカンボジア・プノンペン空港へ到着、出国時も大変だったが到着時もトロンボーンやトランペットはよかったが問題はＸ線検査機に入らないチューバ。在日カンボジア大使館を通じて連絡は入っているはずだが、しかしわからない。検査官と川口さん（OB）の交渉で何とか入国出来た。空港を出て50年前の思い出がよみがえった、感慨深い思いである。

翌日、午前中に JICA カンボジア事務所表敬訪問、午後からタケオ州リファラル病院に勤務する松山市出身の看護師菊池隊員の活動視察、信頼されて働いている様子がうかがえた。

滞在２日目は、愛南町出身渡邊隊員が待つカ

JICA カンボジア事務所受付にて

菊池隊員リファラル病院にて、
TV 局（南海放送）のインタビュー中

カンダール州教育青年スポーツ局に
楽器贈呈後の集合写真

ンダール州タクマウ市 教育青年スポーツ局を訪問し子供たちに演奏で出迎えていただいた。この国では金管楽器が壊れても修理するところも無く台数が減っていたとのこと。少しではあるが愛媛県内で寄付していただいた楽器をお渡しすることができた。子供たちのうれしそうな笑顔が印象的であった。寄付していただいた皆様へ感謝の思いである。

私にとって青年海外協力隊＝カンボジア。カンボジア王国３日間の滞在中、この国の人達がこれからも幸せであることを祈っていた。

50年前“青年海外協力隊”を知り結局隊員として参加はできなかったが、不思議なご縁をいただいて“愛媛県青年海外協力隊を育てる会”の運営委員として活動させていただいている。

青年海外協力隊は日本が世界に誇る素晴らしい平和的外交である。今後も微力ではあるが育てる会を支援させていただければと思い、30周年記念誌に寄稿させていただきました。

軌跡をたどる PartⅢ

恒例の帰国隊員を囲んでトークショー

ミニコンサート　2015年

カンボジア隊員視察の旅（楽器を寄贈）2017年

スリランカ隊員視察の旅（野球用具を寄贈）2018年

青年海外協力隊は国の宝

愛媛県青年海外協力隊を育てる会運営委員
松　岡　　功

私が青年海外協力隊に興味を持った原点は、TV ドラマ月光仮面でした。

正義のために悪と戦う血湧き肉躍る番組で、今なお影響を受けております。

青年海外協力隊に私も参加してみたくなり応募しましたが、面接で不合格でした。理由は年齢がオーバーしていることと、できることがスキューバダイビングのみで、該当する職種がないとのことでした。

少しして、森髙県議（愛媛県青年海外協力隊を育てる会の創設者）より事務局の打診があり、喜んで引き受けさせてもらい、約20年以上になります。当社が毎月１回の運営委員会の会場となり、十数名の運営委員の皆さんが真剣に議論を交わしています。

また前四国支部長で現 青年海外協力隊事務局長の小林宏幸さん（タンザニア OB）が来られ、「愛媛は育てる会の聖地である」とまで、言っていただきました。後任の四国支部長になられた小林秀弥さんも精力的に動かれ、時々運営委員会にも高松から参加されています。今は亡き、私が最も尊敬していた前愛媛県知事 加戸守行さんは、協力隊に対し一番の理解者で忘れる事ができません（写真１）。

さて青年海外協力隊は、開発途上国へ行き、現地の人と一緒に汗を流し、２年間活動するわけで、お金だけを渡すのとは違います。ゆえに、現地の人とはコミュニケーションが取れて、帰国後も交流は続きます。これが、草の根運動となり世界平和に結びつくきっかけになっています。機会があり海外協力隊の福島県二本松訓練所で研修風景を見ましたが、出発前３ヶ月間、実に丁寧に指導されていました。

私達の事務所が「愛媛県協力隊を育てる会」の事務所としてお役に立っているのは、電話の応対が主な仕事です。最近では珍しくなったダイヤル式黒電話が、30年に渡る活動の長さを物語るように、いまだに事務所に鎮座しています（写真２）。

私事になりますが、私は30年間学習塾と予備校を経営していました。「社会に貢献する子供を育てたい」という理念を掲げ、東大に何名合格するよりも、青年海外協力隊に何名送り出すことに興味があり、業界の変わり者と言われていました。

弊社の機関紙の『進級だより』の最後のページには愛媛県出身の帰国隊員のレポートを載せていて、連続300回以上連載し毎月この機関紙を生徒たちや学校にも3,500部配布していました。塾の夏期講習会には OB・OG 隊員の生授業をお願いし、専門の社員の授業よりも人気があり、おかげで人生が変わった子供たちもいます。

私も60歳を超えた時、一遍上人みたいに綺麗さっぱり全部を売却し、気楽な状況になりました。愛媛で７年ぶりに財団法人の認可が下りたので、これからは気楽にボランティア活動でもやろうと思い、カンボジアで孤児院を経営している、内田浩司さん宅に遊びに行きました。そこで驚いたのが現地の人は、川や池の茶色に

写真１　瀬戸内海が眺望できる地に眠る、
故加戸守行 前愛媛県知事

写真２　珍しくなったダイヤル式の黒電話

写真３　カンボジアの井戸掘り事業

濁った水を沸かして飲んでいました。病気の80％は水の影響です。私が活動するのは、本来教育関連ですが（**教育より水だ**）と思い、井戸を掘ろうと決心しました。

しかし、財源となる会社も全て売却してしまっているので、今まで無料で配布していた世界地図を販売する収益で、井戸を掘ろうと思い、2006年５月17日㈱世界地図を設立しました（写真３）。

定款の目的は

①世界地図の製作および販売と啓発（写真４）

②井戸を掘る

の二つです（井戸は現在443基完成）。

数字だけで言えば途方もない数字に思えますが、NGO なので肩の力を抜き今後も楽しくやっていきたいと考えています。

井戸の数の目標である22万基は、地球の表面

写真４　クリントン元大統領に説明

写真５　ギリシャ・オリンピア市に「念ずれば花開く」の石碑を建立

から芯まで穴を空けると、6,357,000m（6,357㎞）にもなります。50年かかるか100年かかるかはわかりませんが、若い人に跡を継いでもらいたいと考えていますが、現在は後継者を探しているところです。

私もボランティア活動を色々やってきましたが、絞って大きく４つの使命としました。

①世界地図を普及すること

②井戸を掘る

③仏教詩人坂村真民先生に言われた「念ずれば花開く」の言葉を広める（写真５）

④ケールの種（青汁の元）を普及

この中で収益を得るのは、世界地図の普及のみです。

すなわち広告媒体として、世界地図を活用してくれる会社を募集すること。おかげで、新しい広告媒体として少し認知されてきました。世界には世界地図を見たことのない人たちが沢山います。楽しい世界地図をどんどん作り、世界の人々の家庭に私たちの世界地図が貼られているという事が目標です。なぜなら世界平和に必ず役に立つと確信しているので、残りの人生をかけています。

最後に、私の意見を言わせていただきます。

日本の宝である、協力隊員は原則として、帰国後特別教師として１年間、小中高の生徒に教える。日本で今一番大事なことは教育です。最高の教師になれる隊員の力を生かさぬ手はありません。

最近ゴルフで歴史を作った松山英樹選手を讃える横断幕が、小学校にかけられています（写

真６)。甲子園へ出場する学校のようにスポーツ関係では横断幕をよく散見しますが、いまだかつて協力隊員が派遣される際、協力隊出身者の学校が掲げているのを一度も見たことがありません。途上国のために心血を注ぐ協力隊員を送り出す学校にとって名誉なことだと思いますが、それが実行されていない事を残念に思い横断幕を見るたびに痛感します。

写真６　松山英樹選手の母校　雄郡小学校の横断幕

軌跡をたどる PartⅣ

砥部焼『翔碧の地球』の除幕　2020年

協力隊員壮行会　2019年

シリア人よりアラブ料理の手ほどき
「地球の料理教室」2019年

高校生と共に「地球の料理教室」2019年

編集後記

コロナウイルスの猛威は１年以上経過するのに、いまだに終息のめどさえたっていない。

2020年は愛媛県青年海外協力隊の30周年設立記念総会の年であったが、コロナ禍であっけなく中止に追い込まれ、砥部焼『翔碧の地球』の県への贈呈式のみ挙行された。2021年は、人々のコロナ禍慣れとワクチン接種で、現在は総会開催の方向で進んできた。

機関誌『参加と協力』も今年で31号の発行となるが、30周年記念特集号のため寄稿者には、文字数をあまり制限せず自由に書いていただいた。ただ恒例の本県出身の隊員レポートは、コロナ禍のため派遣もままならず一時退去帰国の後、再派遣したヴェトナムとルワンダ隊員と、現在国内で待機中の隊員のみとなってしまった事は残念だった。

この１年半でコロナウイルスは、我々の生活、社会、経済までも変えてしまったが、治療薬が定まっていない現状では、もうしばらくウイルスとの闘いが続く事となるだろう。

しかし概ね100年毎に発生するパンデミックを、人類の英知と努力で乗り切ってきた歴史が我々にはあり、今回も必ず終息の日が訪れる事を信じている。協力隊員が途上国で、今までのように自由に汗を流せる日が、遠からん事を祈らずにはいられない。　(Hal)